

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月25日現在

機関番号：23302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20710

研究課題名(和文)女性人工股関節全置換術患者の歩容の自己評価と心理社会的側面の相互の影響

研究課題名(英文) Mutual effects of self-assessed gait and psychosocial aspects of female total hip arthroplasty patients

研究代表者

松本 智里 (MATSUMOTO, chisato)

石川県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：10738389

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：女性人工股関節全置換術(THA)患者の歩容の自己評価の影響モデルを作成することを目的とした。変形性股関節症でTHA施行予定の20歳以上の女性84名に、自記式質問紙調査を術直前と術後6ヶ月の2回施行し、構造方程式モデリングを用いて分析した。術前の歩容の自己評価に影響を及ぼしたのは、術前の跛行への思いとJOA歩行状態、年齢で、影響を受けたのは術前のJHEQ満足度とJHEQメンタルと術後の公的自己意識であった。術後の歩容の自己評価に影響を及ぼしたのは、術後の跛行への思いとJOA歩行状態で、影響を受けたのは術後のJHEQ満足度、JHEQメンタル、全体的健康感と自尊感情であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究より、歩容の自己評価は、歩行能力などの身体的側面から影響を受けながら、全体的健康感や自尊感情といったTHA患者の日常生活を支える心理社会的側面に影響を与えるものであることが示唆された。現在のTHA患者の看護における教育では、疼痛や歩行能力のアセスメントや、脱臼肢位に対する生活指導などは行われているが、歩容の自己評価などの患者のボディイメージに対する教育は十分とは言えない。歩容の自己評価は術前後にわたり、THA患者の看護においてアセスメントすべき一項目であることを、看護教育に含むべきであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose is to develop a pre- to post-operative model of variables that influence and are influenced by self-assessed gait and verify the model's fitness for female total hip arthroplasty patients. Anonymous self-administered surveys were conducted on 84 females with osteoarthritis of the hip and were scheduled for total hip arthroplasty before and 6 months after surgery. The pre- to post-operative model were examined with a structural equation modeling analysis. In both the pre-operative and post-operative models, limping-related distress and walking ability contributed to self-assessed gait, while hip satisfaction and mental status were influential variables. Age was found to contribute only to pre-operative gait, and post-operative public self-consciousness was an outcome variable only in the pre-operative gait model. Post-operative general health and self-esteem were only found to be outcome variables in the post-operative model.

研究分野：リハビリテーション看護学

キーワード：人工股関節全置換術(THA) 歩容 自己評価 女性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人工股関節全置換術 (total hip arthroplasty, THA) 患者は術前は脚長差や疼痛により跛行が出現することが多く、また術後は人工股関節による可動域制限等から、術前後に渡り歩容 (歩く姿の見え、容姿) を意識し自己評価を行っている (松本ら, 2011; 赤木ら, 2010). THA 患者の多くを占める女性は外見に対する意識が強く、歩容の自己評価はそれらに影響されている (松本ら, 2014). 一方で、歩容の自己評価は公的自己意識 (他者から見られる自分に対する意識) といった心理社会的側面に影響することが考えられる。したがって、女性 THA 患者の歩容の自己評価は自尊心等の心理社会的側面から影響を受けるだけでなく、影響を及ぼすものでもあり、この2つは相互に影響しあうのではないかと考えた。そこで、本研究では女性 THA 患者の歩容の自己評価と心理社会的側面の相互の影響モデルを開発することを目的とした。

2. 研究の目的

(1) 女性 THA 患者の歩容の自己評価や心理社会的側面の差別化を図るために、女性低侵襲寛骨臼骨切り術 (Spherical Periacetabular Osteotomy, SPO) 患者の主観的な歩容と心理状態との比較を行う。

(2) 女性 THA 患者の歩容の自己評価と心理社会的側面の相互の影響モデルを作成する。

3. 研究の方法

(1) 横断的調査研究として、術後 6~12 ヶ月の女性 THA 患者と SPO 患者に無記名自記式質問紙調査を行い、術前と術後の歩容の自己評価と心理社会的側面を比較した。

歩容の自己評価

ボディイメージの一部であり、歩く姿の見え・容姿に対する患者本人の感情や価値観と定義した。ビジュアルアナログスケールで測定し、0~100点として点数化した。

心理社会的側面

患者の社会生活への参加を支える心理的な側面として、跛行への思い (ビジュアルアナログスケール)、杖歩行への思い (ビジュアルアナログスケール)、全体的健康感 (SF-36v2®日本語版:スタンダード版: Fukuhara et al., 1998a, b)、自尊心 (自尊心尺度: Rosenberg, 1965; 山本ら, 1982)、抑うつ (抑うつ状態自己評価尺度: the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale: CES-D Scale: Radloff, 1977; 島ら, 1985)、公的自己意識 (自己意識尺度: 辻, 1993) を調査した。

(2) 縦断的調査研究として、変形性股関節症が原因で THA 施行予定の 20 歳以上の女性を対象に、無記名自記式質問紙調査を術前と術後 6 ヶ月の 2 回行った。それを基に、構造法式的モデリングを用いて、術前後の歩容の自己評価の影響モデルを作成した。

歩容の自己評価

上記(1)と同様である。

歩容の自己評価に影響を及ぼすと考えられる変数:

日本整形外科学会股関節機能判定基準 (Japan Orthopedics Association Hip Score: JOA Score) の歩行状態と、日本整形外科学会股関節疾患評価質問票 (Japanese Orthopaedic Association Hip Disease Evaluation Questionnaire: JHEQ) の痛み、動きの項目と、脚長差を変数とした。跛行への思い (ビジュアルアナログスケール) と、公的自己意識 (自己意識尺度: 辻, 1993) も影響要因に加えた。

歩容の自己評価が影響を与えると考えられる変数

全体的健康感 (SF-36v2®日本語版:スタンダード版: Fukuhara et al., 1998a, b)、自尊心 (自尊心尺度: Rosenberg, 1965; 山本ら, 1982)、抑うつ (抑うつ状態自己評価尺度: the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale: CES-D Scale: Radloff, 1977; 島ら, 1985) を変数とした。また、術前の心理社会的側面の変数が術後の歩容の自己評価に影響するというパスを書いた。逆に、術前の歩容の自己評価が術後の跛行への思いと公的自己意識といった、自分の見えや容姿の考え方にも影響すると考え、パスを追記した。

4. 研究成果

(1) THA 患者と SPO 患者の術前後の歩容の自己評価と心理社会的側面の比較

THA 患者 70 名、SPO 患者 10 名から回答を得た。THA 患者と SPO 患者の歩容の自己評価はともに術前より術後に改善した。術前の歩容の自己評価と関連したのは、THA 患者は跛行への思いと杖歩行への思い、抑うつであった。術後の歩容の自己評価と関連したのは、THA 患者は自尊心と抑うつ、公的自己意識、全体的健康感で、SPO 患者は全体的健康感のみであった。

以上のことから、女性変形性股関節症患者の歩容の自己評価をアセスメントすることは心理社会的側面を支援するための一助となると示唆された。しかし、術式によって関係する心理社会的側面の項目には違いがあり、それぞれの時期や特徴に合わせたケアの必要性が考えら

れた。

THA 患者と SPO 患者の歩容の自己評価は、術前後ともに有意差が認められなかったにも関わらず、THA 患者では術前後ともに心理社会的側面と関連し、SPO 患者にはほとんど関連がみられなかった。これは今回の研究で得た新たな知見である。SPO 患者は歩容の自己評価を心理社会的側面ではなく身体面に関連付けているのではないかと考えられる。Uchida et al. (2017) は、地域に暮らす住民が健康に自信を持つための影響要因の 1 つとして、通院が必要でないことを報告している。SPO 患者は自分自身は顕著な身体能力の低下は認めていなくても、通院や手術を勧められるほどの疾患を有したと感ずることで、以前とは違う股関節にボディイメージの低下を感じていたのではないかと推察する。今回の研究では身体面は調査をしていないため、今後は心理社会的側面だけでなく身体面も合わせた調査の必要性が考えられる。

(2) 女性 THA 患者の歩容の自己評価と心理社会的側面の影響モデル

術前と術後 6 ヶ月の両方で回答を得られたのは 84 名であった。術前から術後にかけての歩容の自己評価の影響モデルは有意にならなかった。本研究では、当初、術前の歩容の自己評価は術後の歩容の自己評価に影響するという仮説モデルを作成した。しかし、術前後の歩容の自己評価は相関関係も因果関係も認められず、術前後の歩容が影響し合うというモデルを作成することができなかった。この結果から、THA 患者は術前の歩容の自己評価の程度に関わらず、術後には、その時の状態から歩容の自己評価を行っていることが示唆された。したがって、歩容の自己評価は過去の状態や経験と比較して行うものでなく、現在の状態から評価するものであると考えられる。

一方で、図 2 のモデル内の変数には、術前と術後の歩容の自己評価に対して、有意な影響を及ぼすものや、影響を受けるものが存在した。そこで、術前と術後で歩容の自己評価の影響モデルを分けて作成したところ、各々が有意なモデルとして検出された。術前と術後の歩容の自己評価に共通して影響を及ぼしていたのは、跛行への思いと JOA 歩行状態で、影響を受けていたのは JHEQ 満足度と JHEQ メンタルであった。術前の歩容の自己評価にのみ影響を及ぼしていたのは年齢で、影響を受けていたのは術後の公的自己意識であった。術後の歩容の自己評価にのみ影響を受けていたのは、術後の全体的健康感と自尊感情であった。

本研究により、女性 THA 患者の歩容の自己評価は、術前と術後にそれぞれ影響モデルが存在することが明らかとなった。以上より、歩容の自己評価は患者の日常生活や社会性に影響を与えると考えられるため、術前後にわたり、THA 患者の看護においてアセスメントすべき一項目であると示唆された。

本研究での新たな知見は、過去のボディイメージである術前の歩容の自己評価から、術後の公的自己意識が影響を受けている点である。術前に歩容の自己評価が高かった者は、術後に他者からの視線に敏感になっているという意外な結果が得られた。Oyama et al. (2010) は、THA 術後 2 か月で人工物が挿入された身体を意識すると述べているが、術後 6 ヶ月になっても、それが公的自己意識という形で意識下に残るのではないかと推察される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- (1) 松本 智里, 加藤 真由美, 兼氏 歩, 福井 清数, 高橋 詠二, 平松 知子, 谷口 好美: 女性変形性股関節症患者の術前後の歩容の自己評価と心理社会的側面の検討 人工股関節全置換術患者と低侵襲寛骨臼骨切り術患者の比較, 日本看護科学会誌, 38, 309-317, 2018, DOI: 10.5630/jans.38.309.
ただし、もう 1 件現在投稿中である。

〔学会発表〕(計 3 件)

- (1) 松本智里, 加藤真由美, 兼氏歩, 市塚徹, 福井清数, 高橋詠二, 平松知子, 谷口好美: 術前の女性人工股関節全置換術患者の歩容の自己評価に対する影響モデル, 第 38 回日本看護科学学会学術集会, 2018.
- (2) 松本智里, 加藤真由美, 谷口好美, 平松知子: 女性人工股関節全置換術患者の回復過程における歩容の自己評価の変化と心理社会的側面からの影響, 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016.
- (3) 松本智里, 兼氏歩, 福井清数, 高橋詠二, 平松知子, 谷口好美: 女性人工股関節全置換術患者と低侵襲寛骨臼骨切り術患者の回復過程における歩容の自己評価と心理社会的側面の比較, 第 43 回日本股関節学会学術集会, 2016.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

研究成果についての報告

<http://www.ishikawa-nu.ac.jp/lab/seijin/>

6．研究組織

(1)研究分担者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。